

Ⅰ 研究のまとめ(成果と課題)

Ⅰ 研究の評価

研究の評価については、以下の(1)～(2)で評価を行った。

- (1) 第1層支援(各月のキャンペーンの結果)
- (2) 第2、3層支援(問題行動記録シートの問題行動の数の推移)

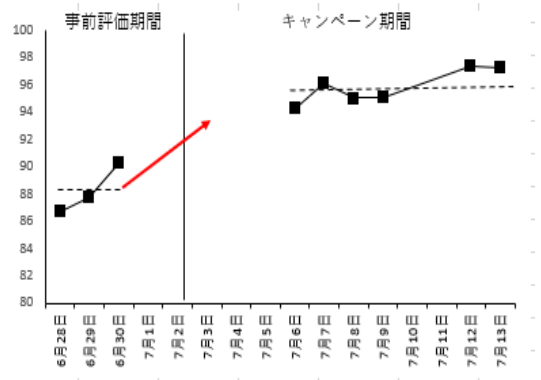
2 成果と課題

(Ⅰ) 成果

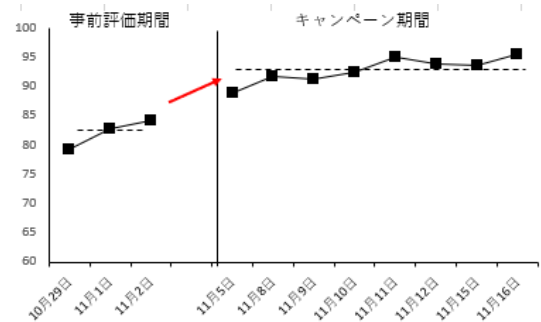
① 第1層支援

1) キャンペーンについて

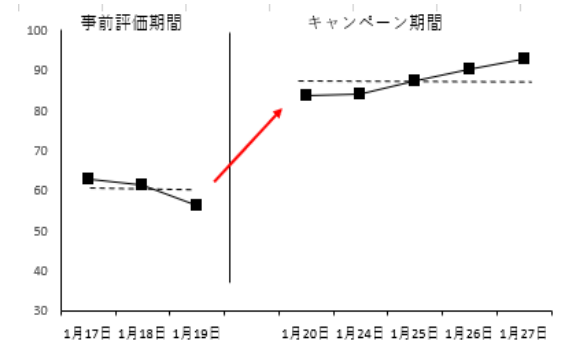
キャンペーンについては、実践も2年目となり、教師、児童とも年間3回のキャンペーンにスムーズに取り組むことができた。キャンペーン期間中は特に意識して児童の適切な行動を認め、ほめるなどのポジティブな行動支援が行われ、児童の適切な行動は増加した。資料1～3のグラフは、3回のキャンペーンにおける、事前・キャンペーン中の取組の結果である。7月(資料1)、11月(資料2)、1月(資料3)どの月のキャンペーンにおいても、児童の適切な行動は増加しており、多くの児童が適切な行動を身に付けることができた。一人の児童は「キャンペーンは富田小のよい伝統になりますね。」と話しており、児童にとっても、キャンペーンが定着してきており、楽しみながら取り組んでいることがうかがえた。また、3学期に実施した職員へのアンケート(資料4)において「キャンペーンは適切に実施され効果があつたか」の質問項目に対しては、92%の職員が「よく当てはまる」「当てはまる」と回答しており、成果を上げたと考える。



資料1 全ての学級における着席人数の割合の推移

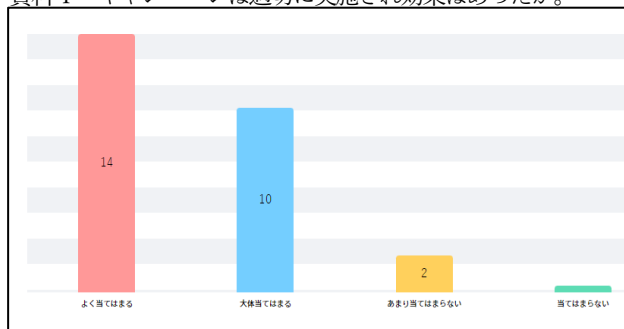


資料2 全ての学級における立腰人数の割合の推移



資料3 全ての学級におけるうわばきを並べた人数の割合の推移

資料4 キャンペーンは適切に実施され効果はあつたか。



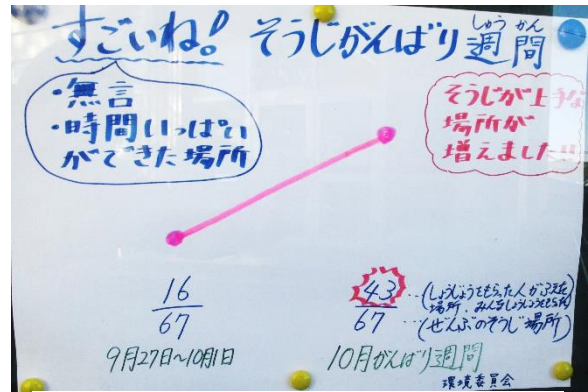
2) 委員会活動を活用した PBS の取組に

ついて

これまでの各委員会の取組を生かしてミニキャンペーンのような形で各委員会が工夫して実践に取り組んだ。これまでの「実践」に「データ」という要素を加え、各委員会が事前・事後で取組の成果を伝えたり、変容を分かりやすく伝えることを意識したフィードバックをしたり、評価基準を明確に伝えたりするなどの工夫を行った。

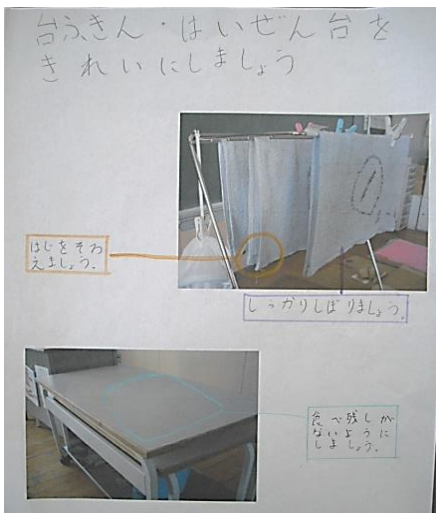
【資料5 環境委員会の取組】

事前	<p>そうじがんばり週間と評価の規準の周知</p> <p>①清掃の始まりと終わりの時間を守っているか</p> <p>②無言で清掃できているか</p> <p>よい掃除の仕方についてオリエンテーションをする。</p>
実践	<p>◎2つの基準を満たしている人に「そうじがんばり賞」を渡す。</p> <p>◎認め、ほめる言葉かけ</p>
事後	<p>事前・事後でそうじがんばり賞の枚数を比較。</p> <p>放送や掲示物でのフィードバック。</p>

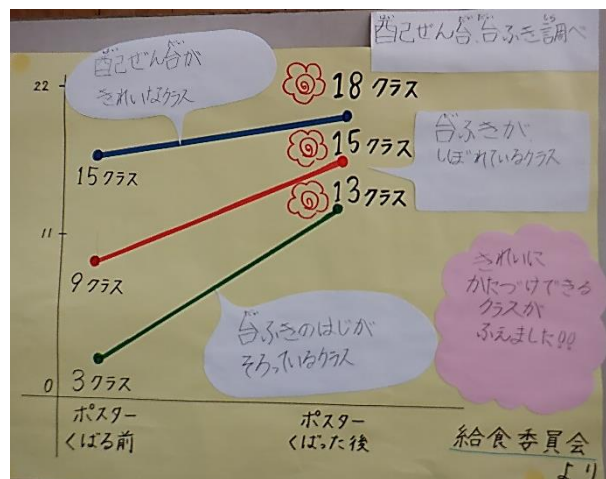


↑そうじがんばり賞を活用した評価の工夫

【資料6 給食委員会の取組】



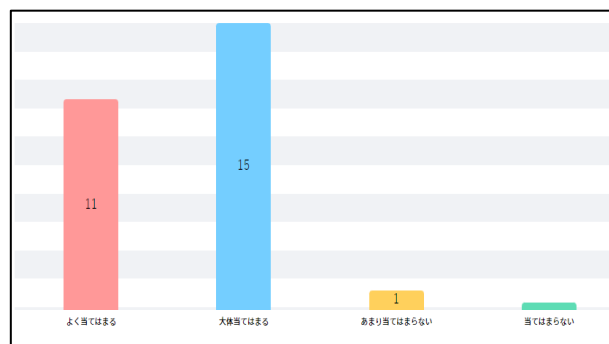
↑評価規準を明確に示す工夫



↑事前・事後の変容を伝える掲示物の工夫

3学期に実施した職員へのアンケート(資料7)においては、「委員会活動を活用したPBSの取組は有効であったか」の質問項目に対しては、96%の職員が「よく当てはまる」「当てはまる」と回答しており、成果を上げたと考える。

資料7 委員会活動を活用したPBSの取組は有効であったか。



② 第2・3層支援

問題行動記録シートを活用し、問題行動対応フローを作成したことで階層的な支援体制の構築を図った。どのような児童がどのように支援されていくのかハード面での整備という面では一定の成果を得られた。初任、採用2,3年目といった若手の職員からは、「問題行動が起きた時に、問題行動記録シートをもとに学年部で話し合うことが定期的に来たので、よかった。」という声や「昨年度までは、直接支援部の先生に支援の方法を聞きに行くなどしていたが、今年度は学年部で小さな問題に対する支援方法をアドバイスもらえたので、去年は本来の順序をとばしていたのだなど分かった。とてもよかった。」などの声がよせられた。また、特別支援部からも「全く名前を知らない児童が(学級が)気づいたらすごく大変な状態になっていた…というようなことが今年にはなかった。」という反応が寄せられ、ある程度の児童や学級の問題を組織的に把握できたと思われた。

③ 研究全体の評価

【資料8 学校適応感アンケート結果】

学校風土尺度の平均値

	6月	2月
学業	10.9	10.9
共同体	55.2	56.1
安全	20.8	21.1
合計得点	86.8	88.4

学校適応感アンケート(資料8)の結果、学業の項目に変化はなかったが、共同体、安全の項目及び合計得点は6月に比べ、2月の方が高い結果となった。

学校適応感とは、学校適応(学校の中でうまくやれていると思っている)に対する児童の認識である。ポジティブな行動を支援するという視点でクラスワイド、スクールワイドで取り組んでいただいたことが、児童の学校適応感につながったと考えられ、本年度の取組の一つの成果であった。キャンペーン等による各月の児童の変容だけでなく、年間を通した児童の変容が見られた。

(2) 課題

① 第1層支援

1) キャンペーンについて

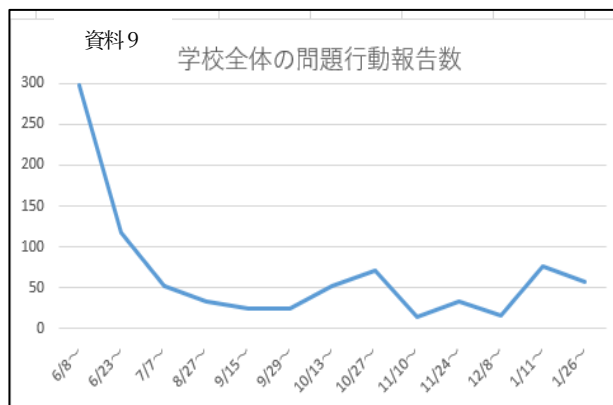
7月、11月、1月どの月のキャンペーンにおいても、児童の適切な行動は増加し、職員の評価は高かったが、その後の児童の適切な行動の継続という点に関しては課題が残った。キャンペーン後に、児童の行動が継続するかについては、定期的にポジティブに評価していくことで、適切な行動の継続につながる。教師自身もキャンペーン後に意識を継続をしていくことが必要であった。

2) 委員会活動を活用した PBS の取組について

各委員会でのミニキャンペーン的な取組の時期に重なりがあること、集会活動の時間の延長が課題として挙げられた。年間を通じて取組を計画的に配置し、各委員会の取組のよさが発揮されるようにすることが必要である。

② 第2・3層支援

資料9は、学校全体の問題行動の報告数の推移である。問題行動の報告数は減少している。また、職員アンケート(資料10)において、問題行動記録シートが、児童の階層的な支援体制づくりの実態把握に有効であったかの問いについては3分の1の職員が否定的であることが示された。



これより、問題行動の報告数は減少しているものの、問題行動の報告数が、学校の実態を十分反映しているとは言いがたい。どのように問題行動の数を把握し、階層的な支援体制につなげていくかについては課題が残った。問題行動記録シートの活用が目的ではなく、いかにして学校全体で児童の問題行動を把握し階層的に支援していくかということが目的であるため、問題行動記録シートについては改善または別の形での提案が必要であると考える。

資料10 問題行動記録シートは児童の階層的な支援体制づくりの実態把握に有効であったか。

